



NISSAN



REALIZE
GROUP

YOKOHAMA



ALTA

日産車体

UD TRUCKS

CHIKIKAI

PRESTIGE
INTERNATIONAL

日産モータースポーツ&カスタマイズ

ROCK PAINT

Quick Pro Paint

5 YEARS COAT
Premium

TOPPAN

Energywith

エムエスピー

NISSAN SERVICE CENTER

CMCエクスマニコム

NGK

NTK

KAMMOTO

Döff

SHIMIZU



mini mini

GA INVESTMENT

T&T

PUMA

LSI

GT

LSI

K&S

Arai

Avic

日産東京 日産神奈川 日産愛知 埼玉日産 日産大阪 NISSAN 日産プリンス福島 日産プリンス埼玉 岐阜日産 京都日産 兵庫日産 鹿児島日産

秋田日産 日産サテライト秋田 日産プリンス秋田 日産プリンス宮城 福井日産 日産プリンス栃木 栃木日産 長野日産 日産サテライト埼玉 千葉日産 日産プリンス千葉 静岡日産 浜松日産 日産プリンス静岡 三河日産
日産プリンス三重 三重日産 和歌山日産 滋賀日産 岡山日産 日産プリンス兵庫 日産プリンス広島 日産プリンス山口 愛媛日産 香川日産 日産福岡 日産サテライト佐賀 日産プリンス長崎 熊本日産 日産プリンス大分
旭川日産 北見日産 帯広日産 日産サテライト旭川 岩手日産 日産プリンス岩手 新潟日産 日産サテライト新潟西 福島日産 群馬日産 日産富山 石川日産 日産プリンス金沢 甲斐日産 松本日産 日産サテライト千歳
日産自動車販売 日産サテライト湘南 日産プリンス和歌山 日産サテライト福山 日産プリンス熊本

・レースリザルト

・監督インタビュー

・ドライバーインタビュー

・TSインタビュー

・学生インタビュー

・あとがき



予選 18位

灼熱のワンアタック！

気温34℃、路面温度46℃の灼熱の中、76kgのサクセスウェイトを背負いQ1は、木村選手がアタック路面温度が高いなか、56号車は、一発のアタックにかけ1:58, 467で接戦の中、5番手で通過した。続く、Q2では、鈴鹿サーキットのコースレコードを所持しているオリベyra選手が担当、他のクルマよりワンテンポ遅らせてコースインをした。こちらも一発のアタックにかけ、1:57, 760をマークした。しかし、ベストラップ(1:57.760)で走路外走行が認められ、ベストタイムが抹消されてしまい18番手で予選を終えた。Q2でベストタイムが抹消されてしまいましたが、56号車が苦手な鈴鹿でQ1を無事突破することができ、Q2でも好調なラップを刻んでいたので決勝にも期待がかかる。



決勝 5位

想定通り？シーズン中盤での大量得点

気温34℃、路面温度49℃と予選より過酷なコンディションのなか幕を開けた真夏の鈴鹿戦。56号車は18位からスタート予定だったが、4号車を選択した為、17位からスタートした。

56号車は、序盤から順調なラップを重ね、21周目にピットインし、オリベyra選手に交代した。順調なピット作業もあり順位を上げ、残り10周を迎えた。まず、87号車にトラブルが発生、さらに88号車をオーバーテイクし7位にそして、666号車がペナルティ、52号車が接触によりスピン、60号車がトラブルによりピットインこれにより5位に浮上。残り5周で52号車のクラッシュによりSC先導のもと5位でチェッカーを受けた。

監督インタビュー



Q. 近藤監督は負けてもすぐ切り替えられるタイプなのか、引きずってしまうタイプですか？

A.結論から言うと、私はレースの結果を引きずらないように心がけているよ。例えば、ニュルブルクリンク24時間レースの場合、一度負けると、その悔しさを晴らすために1年間待たなければならないんだよね。一方で、スーパーGTやスーパーフォーミュラはほぼ毎月開催されるため、次のリベンジの機会が巡ってくるので「悔しい」「負けた」と思っても、「よし、次のチャンスは来月だ！」と前を向くことができるから。

レースの2日後にはお風呂に入って気持ちをリセットし、次のレースに向けて準備を始めるようにしています。これは少し極端な世界かもしれませんが、勝った時も同じで、いつまでも喜んでいるわけにはいきません。どちらの結果であってもすぐに次のレースが来るので、次の戦いに向けた準備が始まります。だからこそ、常に気持ちを切り替え、メリハリをつけることがレースにおいて何より重要だと考えているよ。

ドライバーインタビュー

J.P.オリベイラ選手



Q. 20年以上日本にいて未だにこれは日本の不思議だ、理解できないと思う文化や習慣はあるのか？

A.今の自分自身はすごく日本文化に適応していると思う。ブラジルの実家に帰ると今では「お前はブラジル人というより日本人みたいだ」ってみんなに言われるくらいです。確かに、ここ20年間、日本でのレースに多くの時間を費やしてたのが理由のひとつで、自分のスタイルが、日本でのレースのやり方にどんどんシフトしていったというのがある。確かにもう少し「違うな」と感じる部分はあるかもしれない。20年経った今、日本文化を以前よりずっとよく理解してる。だけど、まだ少し日本語は話せない(笑)。それ以外のことは理解できますよ。

Q.ブラジルといえばコーヒーですが、オリベイラ選手はお好きですか、どんなフレーバーが好きですか。

A.コーヒーは大好きですよ。ブラックコーヒーが大好き。毎日、自分のなかで制限を設けないといけなくらい。そうしないと普段なら1日に3杯くらい？ いや、本当は5杯でも6杯でも飲んでしまう。自分に制限をかけて1日3杯だけに留めるようにしてる。本当にただコーヒーそのものが大好きなんです。砂糖も何も入れません。ブラジルでは、どちらかというと濃いコーヒーを淹れるんです。

日本のコーヒーマシンで作るエスプレッソぐらいがブラジルでは普通のコーヒーのイメージで、シトラス風味やチョコレート風味を混ぜたりはあまりしない。とにかくフレーバーにあれこれ手を加えるようなことはしない。それこそが、ブラジルコーヒーの正統な深みを生み出しているんだと思うね。ブラジルはコーヒーの土地であり、コーヒーにとって特別な場所のひとつだから。ブラジルに帰った時のお気に入りの過ごし方の一つは、コーヒー畑の中をドライブして、その場で淹れたての新鮮なコーヒーを飲むことなんです。

木村偉織選手



Q.自分が乗る56号車に、密かに心の中でつけているマシンの愛称は？

A.ゴジラです。元々R32スカイラインって、「ゴジラ」って呼ばれてて。その圧倒的強さのイメージがR32なので、その相性を今のGT-Rに引き継いでいると思います。

Q.何か始める時に躊躇ってしまうことがあるんです。木村選手ならそれをどのように踏み出したりするのかを教えてください。

A.ためらう時は大体失敗することが怖いのが主な理由だと思うんです。失敗って自分のなかでは50%成功してると思ってます。成功するまで続ければ必ず失敗が糧になるので。その失敗を恐れずにやってみるのを心がけたらいいと思います。ためらってしまうのは、大抵の場合「失敗することが怖い」という感情が主な理由だと思う。しかし、失敗という経験は、自分の中では「50%は成功している状態」と思うようにしています。成功するまで挑戦を続けていけば、重ねた失敗が成功の糧になるので、決して無駄にならないと思う。この失敗を恐れずにまずやってみるっていうことを心がけることが、大切だと思います。

現役テクニカルスタッフに聞いた整備士のホンネ



今回参加されたTSのなかに愛知校の広報担当の中瀬先生の同級生の三河日産自動車株式会社の武川将也さん(右)に現役テクニカルスタッフのホンネを打ち開けていただきました。

Q.学生の不安事としてテクニカルスタッフの仕事量に対しての給料があげられますが、実際の現場の仕事量に対して給料は見合っていますか？

A.やったら、やった分だけもらえますね。

給料に見合っているかと言うとネットなどでは悪い噂を聞くと思いますが、

しっかり会社がテクニカルスタッフに対して考えて目標を作ってくれて、

その目標に向かって各店舗で競い合っています。

それを達成すると給料に反映されていきます。

その目標を達成するには、店舗がチーム一丸となって整備だけでなくお客様に信頼され、感謝されて満足して帰っていただくことが重要だと思います。

Q.会社が用意する目標の達成は、難しいのか？

A.各店舗が1位を狙って来るので、難しい部分はありますが、

目標を達成するために、ミーティングなどを行い、販売方針決定や

お客様満足度を上げられるように主体的に行動しています。

インタビューを聞いて

テクニカルスタッフの給料に対して低いイメージがあったが、今回現役テクニカルスタッフの話を聞いて、「やったらやった分だけもらえる」と聞いて安心した。

いち早く給料を上げる為には、このNISSAN mechanic challengeで必要な主体性やチームワークが重要になると思ったので、学生のうちから主体性やチームワークを培っておく必要があると感じた。

学生インタビュー

1年黒木 琥羽(愛知校)

Q.初めてのメカチャレでどうして広報を選んだのか？また、次参加する機会があれば広報以外の活動を選択するのか？それとも引き続き広報を選択するのか？

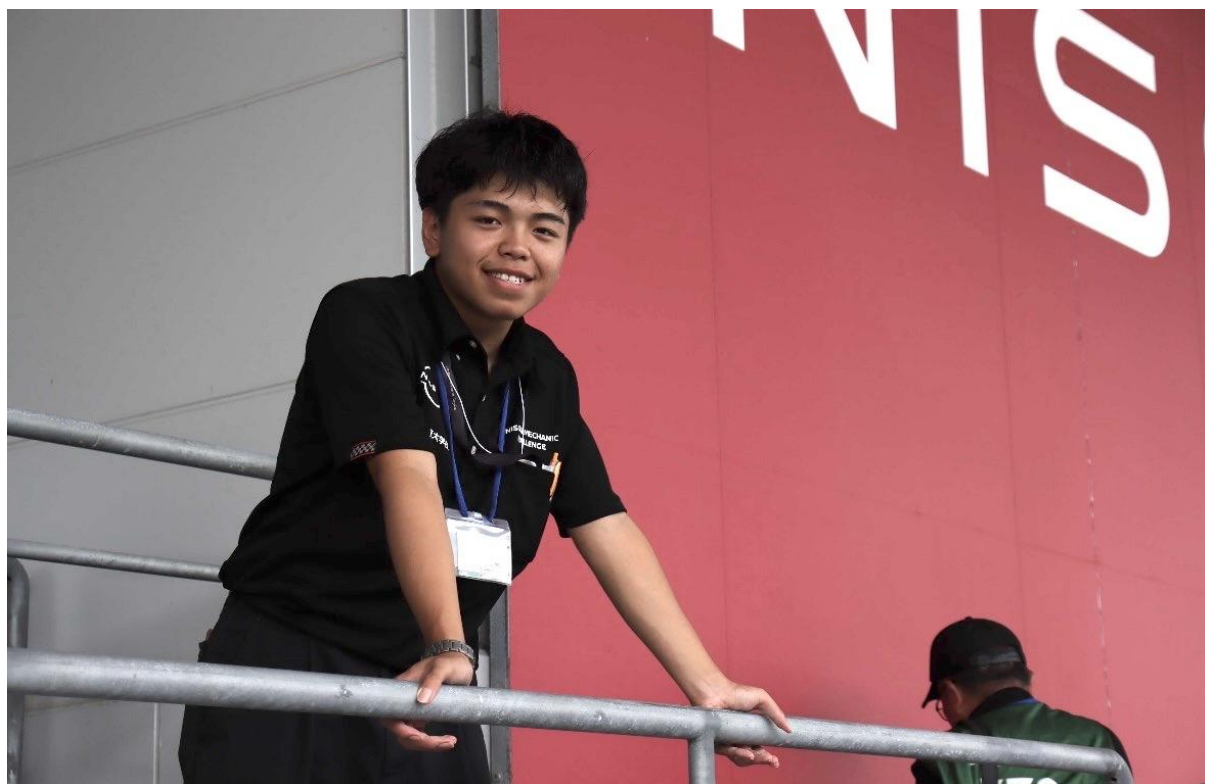
A.広報にどうかと広報担当の中瀬先生から打診があって
クラス担任の先生と副担任の先生に黒木がいいんじゃないかとなり、「じゃあやるしかない」となり、広報を選びました

次参加する際は色々な経験を積みたいのでマネジメントに挑戦してみたいです！

Q.参加する前と今とで、レースへのイメージはどのように変わりましたか？

A.自分の想像通りでした

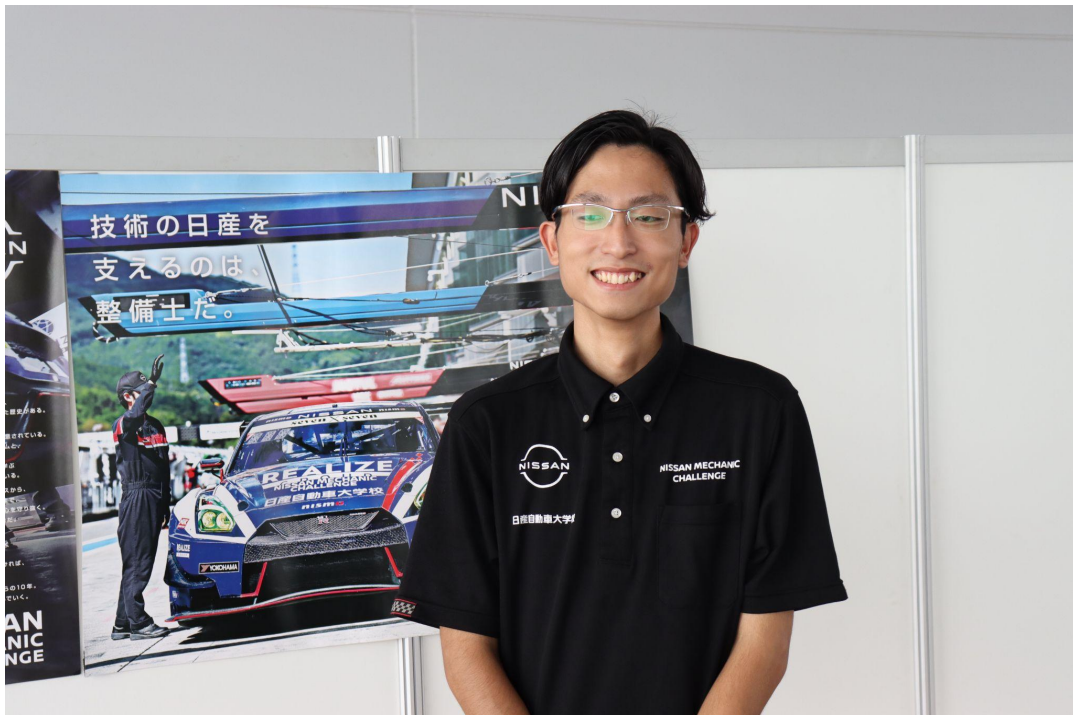
ギャップがたくさんあった中でもアニメで見たことあるレースのままだなと思いました



3年延寿 伝(京都校)

Q.1年の時初めて広報を頼まれて、今では後輩への育成担当へ。このメカチャレを通して「本当に自分が成長した」と一番実感する部分は、具体的にどんなところがありますか？

メカニックチャレンジで広報を頼まれた時、初めて班長を頼まれた時、どのように活動したらよいか全く右も左も分かりませんでした。ただ先輩や担当教員から、丁寧に教えてもらいすごく助かりました。
また当時、監督への取材など良い体験・思い出にでき楽しめたことが印象に残っています。その活動を通じて私が後輩の育成担当になった今ただ単にやり方を教えるということではなく後輩が自分の考えをもち行動をする、挑戦し続けるという環境を作ること。また教えた後輩が班長となり活躍している姿をみると成長を感じます



Q.3年間のなかで、実は「あの時はちょっと失敗しちゃったな、悔しかったな」と思うエピソードと、それをどう乗り越えたかを教えて下さい。

印象に残っていることは

スーパーGTで私はホスピタルエリアの班長を務めていた時の出来事です。

当時活動途中に班員1人が体調不良で帰宅してしまったことがありました。

班長として班員の体調不良をしっかりと聞いていれば本人が無理をすることなく気づいてあげれたと思っています。

班員をしっかりみれていなかった悔しさと、班長としての責任感を感じました。

その際は先生と当時の統括と相談し帰らせるという判断に至りました。

それから班員の顔色や活動の様子をしっかりみるようになりそうすることで、困っていたら助けるという気づきも増えそういったマネジメントの、能力があがったと思いました。この経験を活かして後輩に無理のないように活動してもらい困ったことがあればすぐに相談してもらえる環境作りを意識して活動してます。

あとがき

・今回、愛知校は1、2年生のみの参加なのに加え、年に1回の2校合同開催ということで活動が始まる前から不安な部分が多々ありました。

しかし、1日目から2校で協力して活動を行うことができました。これは、自分たちだけではなく、京都校のメンバーがこの活動にしっかり取り組んでいただいたおかげです。

今回の活動自分たちの至らない点が多々見つけることができたので、次回以降、愛知校の成長した一面をご覧ください。

愛知校

2年 小林 丈琉

2年 加藤 隆也

1年 黒木 琥羽

こんにちは！京都校広報の和久利です！

前回の岡山戦が初めての参加で、今回の鈴鹿戦が2回目の参加となりました。

今回からは1年生も加わり、自分が後輩をカバーしなければならない場面も出てきました。今回のドライバーインタビューでは、1年生と一緒にインタビューを行いました。

今回の活動を通して、自分自身が成長できたと感じたのは、1年生が困っていたところに自分からカバーに入ることができたことです。

岡山戦では、自分自身も先輩方にカバーしてもらった場面がありました。今回は自分が後輩を支える立場になることができ、「少し成長できたな」と感じました。

京都校

4年 中野 嘉人

2年 和久利 聖

2年 親木 諒